令和 5 年 4 月 30 日

加藤　昭宏

# 訪タイ報告書（3 回目）

## 1. はじめに

今回は、3 回目のタイ・チェンマイへの訪問である（令和 5 年 3 月 18 日～22 日）。

1 回目は、加藤の恩師の紹介により知り合うことのできた、リス族の女性（日本在住・オン氏）の協力を得て、現地（チェンマイ空港から約 120 キロ北上した先にある村）まで案内してもらい、リス族が通う小・中学校へ訪問した。そこで校長先生らと話をし、学校に来ていない子どもが複数いること、その背景として「勉強に対する意欲がない子どもが多い」ことを教えていただいた。またその理由として、「畑仕事以外の仕事を知らない」現状や、学校としても「チェンマイ（都市部）まで子ども達と行き、職業体験をさせたいが、お金がなくできない」ことも教えていただいた（加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書」参照）。

2 回目の訪問は、英語を担当する先生らから話を伺った。生活習慣や文化の影響もあり子どもだけでなく親の考えとしても「教育は重要視されていない」現状があることを教えていただいた。そして、まずは小・中学校の授業内で「加藤から日本での経験や文化等を話してもらえると、子ども達の世界が広がるのではないか」と、次回訪問時、子ども達へ話をする時間を設けていただくことについて、検討いただけることとなった（加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書（2 回目）」参照）。

しかしその後、新型コロナウイルスの影響で訪問することができなくなってしまった。加えて、加藤の異動、転職等も重なり、今回の訪タイは 3 年以上ぶりとなった。校長先生にアポを取ったところ、違う学校へ異動してしまったとのこと。同学校の KruKhomwan Punnui 先生（以下、KP 先生）を紹介してもらい、事前に連絡を取り合った上で訪問することとした。

なお、今回は、加藤が非常勤講師を勤める愛知教育大学の学生で、本活動の趣旨に賛同した 2 名も同行し訪問。同行にあたっては、当該学生のゼミ担当教員と綿密な情報共有を図り、愛知教育大学、両学生の保護者の合意、理解を得て同行に至った。

## 2. KP 先生との事前やりとり内容

事前に KP 先生とやりとり（お互い、母国語ではない英語を介しての連絡）。

日程を調整し飛行機を予約。しかし、その後、KP 先生から「その日は夏休みであり、授業がなかった」と連絡が入る。このため、まずはチェンマイにて話を伺い（3-1.）、その後、可能であれば村まで行く（3-2.）計画とした。

加えて、事前のやり取りとして、以下のことを伺う。

・令和 5 年 3 月で、KP 先生は他の学校へ異動することが決まっている。

・KP 先生は、学校に来ない子どもの家へ毎日訪問し、「学校に来るよう」声かけするなどコミュニケーションを図っている。「ただ、他の先生は誰もそのようにしない」（なぜ、他の先生は家庭訪問等へ行かないかについて、意識の差か、方法を知らないためか等、その理由は不明である。また KP 先生も「なぜかはわからない」という）。
・KP 先生が、怪我をした児童、生徒、また村人の治療も担っている。しかし 4 月以降、KP 先生は他の学校へ異動してしまうため、彼らは治療を受けられなくなってしまう。
※村の近くには病院はなく、「村から最寄りの病院までは約 60km 離れていること」また経済的な要因（貧困状態であること、またタイ人以外は医療費が無料ではないこと）等から、病院にかかれないことが予想される状況である。
村の人は KP 先生に対して「あなたは単なる先生ではない。私たちの全てだ」という。
・学校に行っていない子どもたちと会いたい旨を伝えて、了承を得る。
・「プロジェクト」（the project of HRH Princess Maha Chakri Sirindhorn）で、6 ヶ月前は読み書き出来なかった子どもが、できるようになった（UNESCO 関連プロジェクトか？詳細は不明）。

3-1. チェンマイでの聞き取り（3 月 19 日（日））
2 日間、時間を取っていただいたお礼を伝え、話を伺う。
・なぜ、子ども達は学校へ来ないのか
→病気だと言ったり、泣いたりする。また経済的な理由から来ない子どももいる。小学生については、給食費は政府が支払う。しかし中学校 1 年生から 3 年生は、1 日 22 バーツ（日本円でおよそ 86 円）かかる。子どもが（あるいは親が）「払えない」（から、学校へ行かせない）というため、KP 先生から学校に来ない子ども達へ 1 人 1 日 30 バーツ（約 120 円）を渡している。またペンや服を渡したり、月に 1 回お米を配ったりもしている。
親が子どもを積極的に学校へ行かせないことの理由は、経済的な理由である。また後述の「ghost」が「学校に行くなと言っている」という親もいる。
現在は、KP 先生から国王に対して「子どもたちの医療費も無料にしてほしい」と話している（KP 先生は、公務員として教員をしているとのこと）。
・出自に関して
村では、95%はリス族、残りの 5%はミャンマー、中国、タイヤイ族（シャイ族）、モン族などである。
・性教育について
性教育は十分に行われていない。早ければ 13 歳で子どもができてしまうこともある。また男性は、妻がいても違う女性との間に子どもを作ってしまうこともある。
・卒業後の進路について
7 割は町へ出て働き、3 割は家で働く。家で働く人の多くは農家である。
町へ出る若者の多くは、性産業に従事する（ゲイバーなど、男女問わず）。KP 先生から

は、性産業へ従事させないために、つながりのある木材の会社などを紹介している。

なお、４年生（日本でいう高校）以上へ進む生徒は、およそ全体の 3%である。

・KP 先生の普段の生活について

KP 先生は、平日は学校に寝泊まりしている。なお、学校内に寝泊まりできる部屋が 6 部屋あるが、他の先生が使っており、KP 先生は教室内のテントで寝泊まりしている。

また土日は、チェンマイの街中で、卒業生などへの教育活動に従事することもある。

上述のように、KP 先生曰く「他の先生は、学校に来ない子どもの家へ訪問し声かけをすることはしない」。「自分だけが毎日訪問」しており、「先生同士での友達はいない」。「とても忙しいが、自分は幸せである」と話す。

・リス族の信仰について

リス族の人達は信仰心が深く、彼らの中には「ghost」の存在があるという。そのため病気になると、豚や鶏を供え、「ghost」へ祈りを捧げる。それでも治らないと、KP 先生に治療を求めることもある。

彼らは ghost のことを最も信頼しているため、「必要に応じて、祈祷師の真似をせざるを得ないこともある」とのこと。

聞き取りの途中でランチタイムを挟む。
KP 先生はソムタムが好き、と。

3-2. 村への訪問（3 月 20 日（月））

前日に空港にてタクシーを手配し、村まで移動。往復 3500 バーツで手配（約 14,000 円）。なお、予約の際には、同日夕方に同じ場所まで迎えに来てもらうよう頼んでいたが、1 日、タクシー運転手が同行してくれた。同運転手はタイ語に加えて英語も話すことができ、村で通訳をしていただく等とても助かった（学校や都市部と違い村内では、英語によるコミュニケーションが必ずしもスムーズにはいかない）。

（1）村への訪問

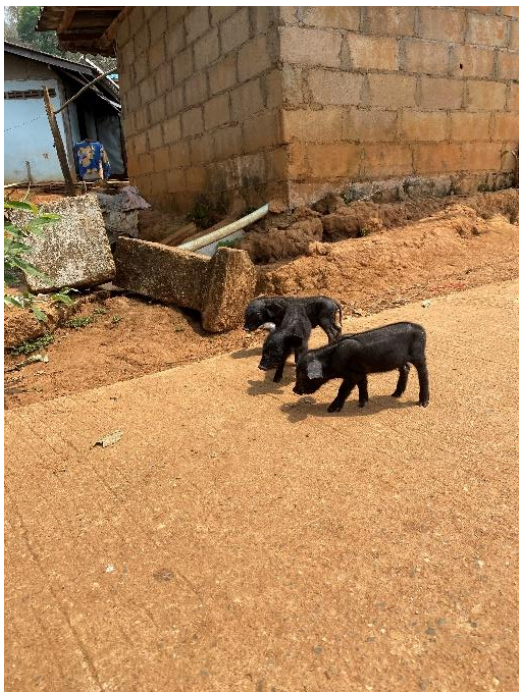
まずは、村へ顔を出した。タクシー運転手へは、村の一画にある宿泊施設（以前、宿泊したことあり）を目的地として伝えており、到着したところそこのスタッフがすぐに声をかけてくれた。このため、タクシー運転手、宿泊施設スタッフ両名が村内を一緒に歩いてくれることとなった。

はじめに、以前お世話になったオン氏（日本在住)、ケン氏（現在はプーケット在住）の自宅へ訪問。ちょうど、オン氏らの母は近くの家へ出かけており、タクシー運転手らが他の村人へ声かけをし、母らがいる場所へ案内していただく。なお、道中、知らない家でトイレ（屋外）を借りたが、快く貸していただいた。

その後、オン氏らの母と久しぶりの再開。涙を目に浮かべ喜んでくれていた。基本的に言葉は通じない（父の姿がみえず、安否を確認するもわからず。タクシー運転手を介しても、またグーグル翻訳を見せても、特に反応がない)。

その後別の家（オン氏・ケン氏の妹宅？）へ案内していただき、そこで食事をいただく（次ページ写真・右側中段参照)。今から学校へ訪問したい旨を伝え、30 分程で辞去。なお、そこで出会った子ども達に、日本から持ってきたチョコ等を渡すと「美味しい」と。日本のチョコの味は、タイでも好まれることを確認。

タクシー運転手と村一面の景色。



3 匹の子豚。村には豚、犬、鳥がたくさん。
村人の仕事の大半は農業である。
道中、子どもが家畜の世話をしている様子も。

トイレ（屋外）

リス族の家庭でご飯をいただく。

オン氏らの母と再会の場面。
言葉は通じなくても、想いは通じている。
遠く離れていても、心はつながっている。

久しぶりの再会を喜んでくれ、こちらも嬉しくなる。
ただ、前回の訪問時にはいた父が、いなくなっていた。

（2）学校へ訪問

次に、学校にて KP 先生と会う。簡単に教室内を見せてくれる（同行した学生らは初見であるため)。

その後、家庭訪問へ。なお、学校までの道のり（約 1.5km）は、先ほど村で食事をいただいた家族 3 人（夫婦、赤ちゃん）でバイクに乗って先導してくれ、タクシーにて移動。ここからは KP 先生の車での移動となるため、リス族の家族は一旦村へ戻っていただく。またタクシー運転手は、学校内で待機していただくことに。

学校の一部の校舎

教室内の様子

（3）学校に来ていない子どものいる家への訪問①

まずは A 世帯宅へ。家は村一帯から少し離れていた。これまでの訪問では歩いたことのないエリアである。家の作りも、掘っ立て小屋のようであった。他のリス族の家と比較しても作りが違っており、貧困状態にあると思われることがわかる。

KP 先生の声かけで、中にいれさせていただく。

〈世帯情報〉

離婚による父子家庭。中国から、25 年程前に転居してきた様子。19 歳の息子、小 4 の娘らがいる（他にも、兄弟、母と暮らす子がいた？）。

この小 4 の女の子が、学校へ行っていないとのこと。訪問時もベッド（かなり簡易的なものであるが）に横になり、スマートフォンで動画を観ている様子であった。なお、加藤から「学校は好きですか？」と問うと、「好きではない」との回答。

19 歳の息子は、家（農業）の手伝いをしているとのこと。家の中は暗く、また生まれたばかりと思われる猫が数匹いる様子であった。

なお、父親は、いきなり？知らない外国人（加藤ら）が家に来て警戒していたためか、もしくは元々の気質かはわからないが、口数が少なくうつむきがちであった。また伏し目がちで目が合わない（焦点が少し合っていない）様子であり、個人的な印象ではあるが、やや鬱的な様子であった（裏を返せば、福祉的な支援によって世帯状況の改善につながる可能性もあると考えられる世帯であった）。

（4）学校に来ていない子どものいる家への訪問②

次に、B 世帯宅へ。同世帯は、A 世帯と同じエリアに位置しており、歩いて 1 分程度の距離であった。10 歳くらいの女の子が出迎えてくれた。

〈世帯情報〉

両親との 3 人暮らし。両親は共働きであり、本日も働きに出かけており不在。仕事内容の詳細は KP 先生も把握されておらず不明（恐らく農業）。本児曰く「母親が病気」でありその世話をしないといけないため学校に行かないとのこと（いわゆる「ヤングケアラー」状態にあることがわかった）。

将来は「母の病気を治すために、医者になりたい」という。

学校に来ていない子どものいる家の様子

KP 先生が案内してくださる

家の外観。先ほど訪問（1）した家（右側の写真）と比べると、
作りは簡素で、暗く、雨漏りする可能性もあるように見受けられた。
不登校問題の背景にある貧困、ヤングケアラー問題などが垣間みえた。

（5）その他

2 世帯への訪問後、KP 先生と共に、KP 先生が平日毎晩通うご飯屋さんへ。

「ここの料理は、美味しいし“クリーンである”」と。「それはどういう意味ですか？」と聞くと、「リス族は、あまり衛生的ではない」とのこと。

なお、加藤の仕事（ソーシャルワーカー：当時）について話をするが、KP 先生はソーシャルワーカーという仕事を「知らない」とのことであった。

その後、学校へ戻り、そこで新しい校長先生らと挨拶。加藤らの訪問の趣旨を伝える。校長先生としても「ありがたい。ぜひ、協力してほしい」との意向。

また、前回訪問時に話をした英語の先生と挨拶ができる。その後、日本人男性を父親に持つ中学生の女子生徒を紹介してもらう（なお、5 年程前に父親は逝去）。同女子生徒は、Instagram 等で学生らとつながり、その後も同学生と交流を継続している。

KP 先生が毎晩通うお店に連れてきてもらう。
先生の想いに心を寄せていただく。

村唯一の店。食料品や日用品を販売している。

4．今後について

今回、3 年以上ぶりの訪問であり、校長先生の異動などもあったが、無事に学校を訪問することができた。また家庭訪問をすることもできた。今後も継続して訪問を重ねつつ、日本からできる継続可能な支援の方法について模索していきたい。またそのためにも、KP 先生が異動した 4 月以降医療体制がどうなっているか、また学校に来ない生徒・児童への対応がどのように変わったかなども、丁寧に把握していきたい。

今回の訪問では、不登校の背景に世帯の貧困や、教育に対する親の意識の低さ、文化的要素、医療の問題など様々な問題・課題があることを学び、肌で感じた。また日本でいう「ヤングケアラー問題」がタイでも存在していることもわかった。

タイでは、もともと仏教の教義に基づいた社会福祉の歴史が何世紀も前から存在する。また家族や近隣のつながりも強いため、コミュニティ内での相互扶助が基盤となっている（独立行政法人国際協力機構（JICA）・株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング編，2022：3-1）。加えて、ソーシャルワーカーを養成する大学も 6 校存在し、ある一定のソーシャルワーカーの配置もなされているが、「地域格差等の社会経済格差は依然として残っており、その是正は大きな政策課題」（同上：3-1）とされている。そして「ソーシャルワーカーに対する認識や理解が進んでいない」（同上：3-37）と指摘されるように、チェンマイではまだその活動が必ずしも定着しているとはいえない状況であった（この点について、政府広報を含むメディアの報道では、ソーシャルワーカーが物資や義援金の寄付に関わる様子が取り上げられることがほとんどで、問題解決のための調査等の業務に関わる姿はほとんど報道されていないという指摘もある（同上：3-37））。

今後、（コミュニティ）ソーシャルワークの手法を用いて、学校教員、村人らと共に、不登校など子どもを取り巻く諸課題の解決に向けて、更なる展開をしていきたい。

〈参考文献〉

加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書」.
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato01.pdf
加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書（2 回目）」.
https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato02.pdf
独立行政法人国際協力機構（JICA）・株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング編（2022）「東南アジア地域ソーシャルワーカー育成に関する情報収集・確認調査　調査報告書」.